大江健三郎
全作品
2

新潮社

大江健三郎全作品2
一九六六年八月三〇日発行
一九七〇年一〇月三〇日九刷
著者大江健三郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
大日本印刷、大口製本
定価四八〇円

©1966 Kenzaburo Ôe
Printed in Japan
〈第三回配本〉

乱丁本はお取替えします

大江健三郎全作品2目次

暗い川　おもい櫂　5
鳥　23
不意の唖　37
喝采　51
戦いの今日　81
われらの時代　127　長編小説
ここより他の場所　303
共同生活　317
ハックルベリー・フィンとヒーローの問題　349

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大江健三郎全作品2

暗い川　おもい櫂

妹たちと母親がいずれおとらず着かざり、父親の運転する自動車に乗ってアパートの車よせから出て行くのをかれは見おろしていた。それから窓を閉ざして窓かけをおろし部屋を暗くした。かれは腹をたてていた。中学に入ってはじめての夏休がはじまったところだった。そしてかれは留守番をいいつかっていた。勉強のために、勉強のために。かれは唇をかみしめ唸り声をあげた。

おれはだんじて勉強なんかするものか、あいつらのいないあいだに羽根をのばしてやる、とかれは考えた。かれはいま、自分が家族の誰一人、愛していないことに気がついていた。そして家族の誰一人、かれを愛していない。かれは羽根をのばすために、まわりを見まわした。なにひとつ羽根をのばすための手がかりはなかった。かれは荒あらしくシャツを脱ぎ、ズボンをずりおとした。しかし裸になってもなにひとつすることはないのだ。

かれはベッドに腰をおろし、床にきちんとそろえた踵をつけ、膝に腕をささえた。そして肩のあいだに頭をたれて、自分のやせた腿とちぢこまったセクスとを見た。セクスは汗ばんで静かにひかり、巣にうずくまってじっとしているおとなしい仔鳥のようだった。身うごきすることもできないで、チュッ、チュッと啼いている仔鳥。かれはその姿勢を気にいったので長いあいだそのままでいた。

暑かった。とざした窓のむこうの高い庭木の梢にしがみついている数しれない蝉が鳴いていた。汗が体じゅうのあらゆる部分から流れ出た。とくにそこだけひんやりしている尻の皮膚からにじみ出る汗が、われめをつたってすべりおち、肛門のまわりの毛にこびりついてゆくのが気になった。しかし、かれは自分の尻にさわりたくなかった。尻にふれることがなんでもないときと、ぞっとするほど厭なときとがある。いま冷たく鳥肌だっているような感じのそこへ指をやるだけで悪寒におそわれそうだった。そこでかれは、尻をシーツにこすりつけることでがまんした。

すっかり裸でベッドに腰をおろし頭をたれている、その姿勢はまったく弱よわしく、絶望的に無防禦な感じだった。そうしているところを、剛い胸毛のはえた男におそわれたら、うむをいわさず凌辱されるだろう。かれは動悸がはげしくなるのを感じた。それはいくたびもくりかえされ

たかれのおきにいりの空想だった。そしてそう空想するたびに、かれは自分がやがて男色家になるのではないかとうたがっていた。しかし、いまドアは内側から鍵をかけて閉ざしてある。かれの家族の部屋はそのアパートの最上階にあって、右隣りに黒人の外国兵にかこわれている女が住んでいるだけだ。かれを凌辱する人間はまずやってきそうになかった。

暑かった。あまりに暑かった。尻のしたのシーツはぐっしょり濡れてきみが悪くなった。かれはのろのろ立ちあがった。汗が腿をつたって勢いよく流れおちた。それはごく短かいあいだこころよかった。くるぶしの上で汗はふたまたにわかれ、そこらいちめんをくすぐったくしながら足うらへすべりこんだ。

いったん立ってみると、すっかり裸ではうまくかっこうがつかなかった。すこしまがった背、せまい腰、ひらいた膝がとくにうまくゆかなかった。そして自分のぶかっこうさに狼狽すると、たちまち意味のあいまいな勃起がはじまってしまう。

かれは腰のわきに腕をたれ、不安定にひくひくしている固いセクスを熱い空気にさらして、ぐったり立っていた。蝉はあいかわらず鳴きしきっていた。熱帯にいるみたいなものだ、とかれは考えた。そして体いちめんから汗を流しながら部屋をあるきはじめた。かれは熱帯のジャングルをあるく狩猟家のように胸をはり、注意ぶかくまわりを見はりながらあるいた。かれは精悍な腰をした猟犬の胴にかけた皮紐をにぎりしめているのだと考えた。かれは架空の猟犬にひかれてぐんぐんあるいた。

かれは疲れきって頭がくらくらしはじめるまであるいていた。それから立ちどまり、ドアの外、廊下のすみの便所へ行くことを考えた。しかし裸で廊下に出たところを、隣りの女に見つかると困ってしまうだろう。それに隣りの女もまた便所に行こうとしているとしたらますます困ってしまう。かれのみならず、母親も妹たちも、かれの家族だけが使用できる便所のあるアパートへうつりたがって父親を非難していた。しかしそれは当面の問題、早急に解決することのできる問題ではない。かれは母親たちの部屋へ入ってゆき、末の妹が夜ふけにつかう、馬の頭の装飾のついた便器へまたがった。暑かった、なにもかも暑かった。便器までじっとり汗ばみ、なまあたたかかった。

かれは便器のふたを閉じるまえに眉をひそめて自分の排泄物を点検し、唾をその上へ吐きつけてから自分の部屋へ戻った。もう狩猟家のあそびをつづける気にはならなかっ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

た。かれはしばらくそのまま立っていた。セクスが力をうしない、ふたたびちぢこまっておとなしい仔鳥にかわっていた。かれは歯をかみしめ顔をふりたてて、あごのくぼみにたまった汗をふりはらった。それはうまくいった。母親たちの部屋で柱時計が音をたてていた。午後三時だった。勉強なんか絶対にするものか。

時報がおわると、かれは床に両掌と膝をついた。それからかれは犬のように大きく口をひらいてあえぎながら這いまわりはじめた。かれは自分を一匹の犬だと考えた。しかし、たれさがったセクスがゆれうごいて不愉快だった。かれは人間のセクスが犬のそれのように下腹にしっかりくっついているべきだと考えて残念におもった。裸で這いまわるものの身にもなってみろとかれは考えた。

かれは便器のところまで這ってゆき、犬のやりかたで尿を排泄しようとしたがほんの一滴しか出てこなかった。かれはふたたびがむしゃらに這いまわった。汗が眼にしみて痛かったが、たちどまってそれを拭う余裕などはなかった。そのあげくすっかり疲れきって、かれは床のうえに腹ばい、激しく息をついた。心臓がしめつけられて苦しかった。

体じゅうが汗まみれだった。かれは、そのままぐったりして寝そべっていたかった。しかし腕に力をこめ、震える膝をたてると、かれはあごをつきだしてあえぎながら部屋をもうひとまわりするまで休まなかった。それは意味のないことだった。しかもかれは苦しみながら克己することにじゅうぶん満足してそれをやりとげ、腿を汗でべとべとさせてたおれこんだ。眼をつむり頬を床にふれ埃のにおいのする息を吸いこみ、かれは長いあいだそのままでいた。蝉は執拗に鳴きつづけていた。

窓枠を遠慮がちな掌が叩き、かれを呼んでいる声が聞えた。窓のむこうにせまく張りだした露台から隣りの女が呼んでいるのだ。かれは大急ぎで起きあがり、汗にぬれた皮膚の上じかにシャツをつけ、喉まできっちりボタンをかけた。ズボンをはくあいだに、シャツの布地はすっかり汗にしみこまれた。それからなお湧いてくる新しい汗。

かれは窓にかけより、窓かけを開いた。ガラスのむこうで隣りの女が中年ぶとりのした立派な顔をかれの家族の部屋のがわへ乗りだしてにこにこしていた。かれもまた窓をあけ、露台へ出た。熱気のこもった風がかれに押しよせてきた。

「暑いわね、ぼうや」と女が日本語にしてはあいまいな発音でいった。「お留守番？」

女の背後に、大男の黒人がばかな子供のように笑いながら立っていた。その黒人だけで露台はいっぱいだった。
「ええ、暑いですね」とかれは注意ぶかくいった。
「ぼうや、写真とれるでしょ？」と、桃色の堂どうとした舌をのぞかせて女はいった。「わたしとピーターソンとを写してくれない？」
大男のピーターソンがむやみに笑いながら、その大きい指でつかんだカメラを女の低い背ごしにさしだした。かれはそれをうけとった。ピーターソンが英語でなにかいったがわからなかったので、かれは狼狽してカメラをかまえるふりをした。
大男はたちまち表情をつくろって女をだきよせた。かれは小さく明るい矩形のなかに、光にあふれた恋人たちを見つめた。黒人は逞しく健康にみちて輝やき笑っていた。女は頬のまわりや眼のふちの皮膚こそたるんで皺だらけだったが、やはり美しかった。かれはそれをはじめて発見しておどろいていた。日頃、女とかれの家族は口をきかなかったし、かれの母親は、外国人の情婦である中年の女を軽蔑していた。かれは片眼をとじシャッターを切った。
女がおおぎょうに感謝の言葉をのべた。黒人はかれへ腕をのべた。かれは外国人と生れてはじめて握手することを、夏休のはじめのうまい記念だと考えた。黒人も嬉しそうにしていた。女はかれをそこへまたせておき、コオフィをとりに部屋へ戻った。黒人がかれに話しかけたが、かれには答えられなかったので、かれは頭をふりながら笑うだけだった。黒人は話しかけるのをあきらめやはり笑いながら狭い陽よけの下へがっしりした体をいれてかれを見つめていた。暑い陽にさらされてかれは待っていた。それからかれは礼儀正しくコオフィを飲んだ。
「ぼうや一人でお留守番なの？」と女がいった。
「ええ」とかれはいった。「夏休の宿題をやらなきゃいけないんです」
「ずいぶんはかどった？」
「今日は暑くて」とかれはいった。
「ほんとに暑いわね」と女はいった。「一人でさびしいでしょ？」
「いいえ」とかれはきっぱりいった。「ぼくは一人でいるほうがいいんです、家族を好きになれないんです」
女が立派な口腔を陽の光に輝やかせて笑った。喉の桃色の柔らかな膜をみてかれはぞくぞくした。そこには唾のこまかなあわがこびりついていた。
「母がいつもやかましいことをいってあなたはお迷惑です

ね」とかれは真剣にいった。
「いいわよ」と女はいった。
かれらの会話のあいだ、ピーターソンはあいかわらず嬉しそうな顔で歌をうたっていた。黒人のデニムのシャツは汗に濡れていた。
「あの人、ばかみたいでしょ？」と女はいった。「なにからなにまで人一倍ふとといのよ」
かれは当惑して黙っていた。激しい光線がピーターソンの毛むくじゃらの足にあたって眼もくらむばかりだった。
「歌が好きなんですね」とかれはいった。
「いつも歌ってるのよ」と女はいった。「歌っているときのほかは、おったててるのよ」
かれはびっくりした。
「わかる？　いつもおったてているのよ」
かれは黙って首のまわりの汗をぬぐった。女も胸にふかく腕をさしこんで汗をぬぐい、そこから濃くてじっとりした臭いがのぼってきた。そしてそのあいだもずっと女は声をあげて笑っていた。
「あれで人を殺したこともあるんだから」と女は笑いのなごりに喉をひくひくさせながらいった。「朝鮮で五人もやっつけたのよ」
かれは尊敬とおびえのこもった眼でピーターソンを見つめた。かれは英語の会話の授業をもっとしっかりやっておいたらよかったと後悔していた。準備なしに話しかけることはとてもできない。ピーターソンは鼻のまわりに黒っぽく光る汗をふきだし、眼をつむって歌っていた。
「いい歌ですね」とかれはやっといった。
「いい歌でしょ」と女はいった。「結局、人生のことをうたってるのよ。生きてゆくことは、暗くて冷たい川を泳いでゆくことだというのよ。それから、やはり暗くて冷たい川をおもい櫂でこいでゆく、という文句もあるわね。二節目だけど」
そこは明るく暑かった。かれはおもい櫂をもっていもしなかった。しかしかれは自分が大切な人生の知恵をさずかったような気がしていた。こんなふうに思いがけなく、しっかりした人生を知ってゆく、これが大人になろうとしている人間のやりかただ。
「今夜、わたしの部屋で食事しない？」と女がいった。「ピーターソンも喜ぶわ」
かれは感激してそれを承諾した。そして、かれはもっと女と話をしていたかったが、そこが眼もくらむほど暑かったのでピーターソンと握手をして別れをつげた。部屋に戻

るとかれは大急ぎに裸になり汗をぬぐった。体じゅう、汗のむれた臭いがした。かれは隣りの女と、その情人に知りあったことが嬉しかった。ピーターソンは朝鮮で人を殺してきた男だ。かれと一緒に夕食をすることは、どんなにおもしろいだろう。それに女がいかに親しげに話してくれたことか、いつもおったてているなんて。かれはピーターソンに英語で話しかけながら食事をしている自分をゆめみた。留守番の最初の夜が楽しくすごせること、それはまったく僥倖というべきだった。大切なのはそれまでの時間をどうするかということだ。かれは時計を見にいった。四時、かれは少し眠ることにしてベッドへあがった。裸の皮膚にシーツがこころよかった。かれは寝がえりをうって体を安定させ、ねむりこんだ。眠ざめると活力にあふれる驟雨が窓をたたいていた。涼しかった。かれは身ぶるいしておきあがった。

窓かけをひらくと短かい張出しに雨が激しくしぶいていた。そして雨粒のこびりついてふるえている窓ガラスの隅に褐色の蝉がしがみついているのだ。それはかれのすぐ眼の前にせんさいな皺におおわれた腹部をさらしていた。かれは硬くつやつや光る蝉の眼を見つめた。それがかれを見かえした。かれはびっくりした。かれは裸で足をそろえて立っている自分がばかにされているような気がした。ガラスを拳で叩く。蝉が雨の中へまっしぐらにとびたってゆく。あとに雨がしぶいている。かれは満足して、窓かけをたらし、再び部屋を夜明けのようなうす暗がりへ戻した。

ピーターソンとその女との夕食へまねかれるためにはまだ時間が早すぎるようだった。それは待ちどおしかったが、睡気がすっかり去りきっていないということもあった。そこでかれはベッドへかえりシーツの中へもぐりこんだ。

つぎにかれは部屋の壁のふるえる小きざみな音で眼ざめた。頭がぼんやりしていた。頭から肩のまわりいちめんに、夕暮のかすかなくらがりと、しめっぽい匂いがたまっていた。かれは身ぶるいし、つづけてくしゃみをした。小さい換気窓が開いたままだった。かれは跣で床におり、引紐をゆるめて窓をとざした。それから机の上の紙箱のなかをさがし、オレンジ色の丸薬をとりだすと、風邪にとりつかれて寝こんでいる男の精密画がかきこまれているラベルをみつめながら、水なしで飲み、ベッドに戻った。喉まで毛布をしっかりくるむと皮膚の下に悪寒が小さくとどこおった。かれは力のない欠伸をしてから枕に頬をこすりつけ

た。かれは夏休がやっとはじまったところで、かれ一人留守番をしていることを思いだした。風邪をひいたらどんなにこまるだろう、看病してくれる人間がいない。それからかれは急にピーターソンの情婦から夕食にまねかれていることを思いだし、あわてて上体をおこした。遅くなってしまったかもしれない。

そのとき再び壁が音をたててふるえ、かれをちぢみあがらせた。壁は音をたてつづけた。壁の向うで硬質のものがけいれんし、呻きたてあえいでいた。それは壁をこえて爪をさかだてながらおそいかかってきた。そして、急激な停止。

かれは自分の頬が卑猥な笑いにまみれてしまうのを感じた。あいつらは、おれが寝てるまに唸りながらやったんだ、とかれは考えた。かれは唇をゆがめて笑った。ピーターソンの女は寝たあとで洗滌するために、部屋に附属している水道の蛇口をつかっている。それはかれの妹まで知っていることだった。女は、かれの家族と共同使用の便所でそれを試みているところをかれの母親にみつかって注意されてから（その時、現場をおさえたのがほかならないかれだ）部屋の水洗コックに無理な姿勢でまたがりはじめた。

しかし水道管は、かれの部屋とのさかいの壁のなかを奇妙なぐあいに折れまがって通っているので、女がコックを押すたびに、汚物をあらいながすための水は、かれの部屋にまで、きわめて大っぴらな屋鳴りをひびかせる。

水道管が壁の向うで、直腸をもれる空気粒のだらしない音のような、まのびした共鳴音をひびかせた。かれは嬉しがって笑った。太い頸とがんじょうな肩にのっかった、形のよい堂どうとした女の頭をかれはふしぎな親しみをこめて思いえがいた。それから、しっかり足をふんばって尻をたれた女の、水にぬれて冷たさにびくつく不括約筋、まじめな顔。

壁の向うで立ちあがるけはいがあった。指の腹にゴム紐のやわらかい抵抗をかんじながら下穿をずりあげる、一種のかいがいしい感情がそこからつたわってきた。それから白く大きい顔がゆっくりむきをかえ、眼と鼻のまわりに皺をよせて窓の外の夜をほんの少し見る。それからしっかりして肉の厚くついたあごをあげ、身ぶるいするように頭をふるわせ、そこを出てゆく。ぼくのために、早くすませたピーターソンがそれをまっている、とかれは友情にみちて考えた。あの黒人はいい奴だ。ぼくには立派すぎる友人というものだ。

しかし、それからがうまくなかったのだ。しばらく女と

ピーターソンの話しあう声が聞えていて、ふいに荒あらしく喚く声がおこった。そしてかためた拳で殴りつける音と悲鳴。かれは尻に火をおしつけられたようないきおいでとびあがった。壁のむこうで、外国語と日本語の激しい罵りあい。そして、もうわけのわからない、とっくみあいのけはい。

かれは痛むほど眼を見ひらき、壁を見つめて立っていた。かれは唇をかみしめ、胸をはげしく波うたせた。かれは涙ぐみそうになるほど感情をたかぶらせていた。犬の悲鳴のような、すさまじい呻き声、それから、ドアを乱暴にひらき階段をかけおりる音。床にたおれているらしい女の泣きわめく声。

かれは窓かけの狭いすきまを指でひろげ、すっかり昏れている庭を見おろした。車よせの入口の電灯のあかるみを、大男のピーターソンが後もみずに大股で横切っていった。かれはぼうぜんとしてベッドに戻り横たわった。隣りではなお女のむせび泣きがつづいていた。なにもかもふいだとかれは考えた。空腹がかれをなやませた。おれは自分で冷蔵庫から食物をとりだしてこそこそ食べなければならない。はじめからそうだとわかっていたら、もうとっくに食べ終っていたんだ。あの黒んぼやろうに淫売やろう。かれは少し悲しく、むしゃくしゃした。かれは枕もとのラジオのスイッチをひねる。すさまじく早いテンポのポピュラー・ミュージックがそこからふき出す。かれは一人ぼっちだった。運が悪かった。夕食をはじめる気力もうしなって、かれは空腹をかかえたまま、まったく不機嫌に音楽を聞いていた。

ドアを爪でひっかく音がした。かれはむっとむくれたまま、シャツをつけてドアを開きにいった。襟のひろくあいた、黒い下着のような服をつけたピーターソンの女が眼を充血させ下まぶたに涙をきらきらさせて、憂い顔で立っていた。かれはすっかり気おされて口ごもった。

「夕食をいっしょにする約束だったわね、ぼうや」と女がいった。

「ええ」とかれはおどおどしていった。

「お迷惑？」

「いいえ」とかれは狼狽していった。

「じゃ、いますぐ来てよ」と女はいった。

「ええ」とかれはうらがなしい気持でいった。しかしかれはいきたくなかったのだ。

女の部屋には脂と煙草の強い匂いがしていた。そして大男が五人ほども寝そべることのできる広さのベッドが堂ど

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com